

平成20年度生きがい情報士研究集会報告

隣びとのために何ができるか

統計の中でも見て取れる問題なのが、75歳以上の人口が高くなっていくということ、そしてもう一つに、認知症の人口が増えていっているということがあります。

従来の日本のシステムが「健康な男性」という制度設計のところから、今日の高齢社会・認知症の方たちが増えていくという社会の中にあっても、なおかつ一人ひとりの存在感が認められるという実態像に向かったの施策が、今後は大事になっていきます。

一人ひとりの加齢に伴う変化に、国の政策は追いつきません。

全国でも、多様化している中でも、隅々までサービスが行き届く制度設計は難しくなっています。

国から出されている平均像と、私たちが暮らしている空間での実態像とで、満足感・ニーズ・充足を誰かが担っていかなくてはなりません。それがみなさん達だと、私は思っています。

電話や聞いているだけじゃわからない。触れなければ、交わらなければ、加齢の中にある問題はわかりません。実態像をつかむこと。それはコミュニケーションということ。それこそが、みなさんの仕事に大事なことだと思います。

この社会に実際として、75歳以上の人口象や認知症の方の存在があるということ。

存在することを理解し、どのように支えたらいいのか。どのようにこの方たちを理解していけばいいのか。

隣びとのために、何が役にたてるだろうか、そんな問いかけをしてほしいのです。

年を重ねるということはすべての人の宿命であります。

年をとるといふことの暮らすことの意味合いを理解することが大事な一歩ではないでしょうか。

血縁による縁から、社会的な縁へ

もう一つ、2030年には単独世帯が37.7%と高い比率になっているとのデータがあります。

そのうち男性の3割・女性の2割が生涯未婚であると出ています。

私たちはどこかで、支え合うというのは、血縁による支えというのがあると思ってきました。



しかし、高齢者も増え、生涯未婚率も高くなってきている今日、私たちは家族による支え、血縁による支え、従来の日本の伝統による支えは、望もうにも望めない現実があります。

つまり、私たちは今、「血縁による縁」ではなく、「社会的な縁」それが生きていく中に必要になっていくのではないかと思います。

また同時に、社会的による縁によって支えられている人たちに対し、特別なものという見方をしたり、他人様のお世話になっているという感覚ではなく、それが当たり前になっているという、変革の時を迎えています。

量として、お年寄りが増えてきたという認識ではなく、社会に何を及ぼしていっているのか、従来のシステムを破たんさせているのか、破たんしていっていることに対して手をこまねいていいいいのか、私たち全員が考えなければなりません。

家族で支えることの困難性、血縁への期待が薄くなっていく時代の真ただ中で、私たちが社会的な縁をつくる、そのお一人おひとりになってほしいと願っています。